

(8)

印度學佛教學研究第 62 卷第 2 号 平成 26 年 3 月

榊亮三郎が収集したネワール仏教写本と Siddhi harṣa Vajrācārya 一族

吉 崎 一 美

はじめに 榊亮三郎 (1872-1946) によるネワール仏教写本の収集活動は二度にわたって進められた。高山龍三氏によれば、「榊亮三郎は 1907 年 3 月フランスに留学，帰路インド仏跡をまわり，1910 年 4 月帰朝した。(中略) (その際に榊が収集したネワール仏教写本について,) 渡邊 (海旭) の本には，インド旅行の際獲た八〇余部の写経で，なかには八千頌般若の貝葉古写経もある，と書かれているのみである。(中略) また 1913 年帰国後の談話で，高楠順次郎は，京都の榊博士が買われたものが凡そ五〇部ある，と書いている。(中略) (しかしながら) いずれも (榊が) ネパールに入ったかどうか記録がない。(中略) 1923 年榊はふたたび欧米各国インドに出張，このときはネパールに入ったと足利惇氏が書く」という ([高山 2009: 11])。この第二回収集について，足利氏は，「(榊亮三郎先生は) 大正十二年 (西暦 1923 年) 三月，欧米及び印度視察のため六ヶ月間の出張を文部省から命ぜられたが，印度においてはネパールに入り，仏教流行の現状を細密に視察せられた。(中略) この際先生が印度において蒐集された梵本の大部分は，今日，東海大学の所蔵になっている」と述べている ([足利 1980: 8]: 以上の引用中，カッコ内は吉崎の補足を示す。また [高山 2009] の引用文中に挿入された典拠を省略した)。

本稿では，榊亮三郎が収集した京都大学所蔵梵文写本コレクションおよび東海大学所蔵梵文写本コレクションについて，それぞれの先行カタログ ([Goshima and Noguchi 1983], [Iwamoto 1960]) を参照しつつ，ネワール語を主要言語とする奥書すべてを再調査し¹⁾，その成果をもとに Siddhi harṣa Vajrācārya とその一族について報告する。余の成果は他日の紹介を期する。本稿が特に彼ら一族に注目する理由は二つある。[1] 中村元先生がネパールを訪問された際に，一人の金剛師 (ヴァジュラーチャールヤ) の紳士から「わたしの祖父はサカキさん榊亮三郎に協力しました」と挨拶を受けた ([中村 1967: 64]: 原文ママ)。この紳士はネパール政府考古局長官であった Pūrṇa harṣa Vajrācārya 氏 (ネワール暦 [N.S.] 1042-1132/1133) であり，したがって「祖父」とはビル・ライブラリー (Vir Pustakālaya or Ghaṇṭāghar Pustakālaya:

榊亮三郎が収集したネパール仏教写本と Siddhi harṣa Vajrācārya 一族 (吉 崎) (9)

現在のネパール国立古文書館) のパンデイトとして活躍した Siddhi harṣa Vajrācārya であったことになる ([Who's who 2003: 63]). 後年, プールナ・ハルシャ氏は拙共著へ序文を寄せられ, 「京都大学の榊亮三郎教授もビル図書館を訪れ, パンデイトであったシッディ・ハルシャ・ヴァジュラーチャーリヤと親交を結んだ」と述べ, 中村先生のネパール訪問にも言及された ([吉崎・田中 1998: i-ii]). [2] ネパール仏教史における写本書写から印刷本流布への転換期を考察する上で, シッディ・ハルシャの一族は興味深い貢献の一例を示している。これらについて,



て, これまでに判明した調査結果を報告する。なお写真は, 故 Pūrṇa harṣa 氏の自室に飾られていた Siddhi harṣa 氏の肖像画である (2012年12月, 田中公明氏撮影)。

1. Siddhi harṣa Vajrācārya (Surataśrī mahāvihāra, Takṣa or Taḥche[ṃ] Bahā, Asan, Kathmandu) 京都大学写本 (以下では K と略す) K-38 [*Ekallavira*]-*Caṇḍa-mahāroṣaṇa-pañjikā Padmāvati* (undated) は Surataśrī mahāvihāra の Siddhi harṣa Vajrācārya による書写である。書写の典拠となったテキストは, 彼の勤務先であったビル・ライブラリー所蔵の同名写本 ([BSP 7-1: 150, kramāṅka ṭṭ-402, viṣayāṅka 222, N.S. 417]) であったと思われる。K-38 の奥書は, ビル・ライブラリー写本の奥書に続けて, この度の書写者である彼の名を追記している。また K-108 *Samvarodaya-tantra* を補修した Siddhi harṣa (undated, 姓および住所等の記載無し) は同一人物の可能性がある。彼は Bābu kājī Guruju (or Bābu kājī Vajrācārya) とも呼ばれ, その生没年は N.S. 999–1072 (ヴィクラム暦 [V.S.] 1936–2009, 西暦 [A.D.] 1879–1952) 年である。彼はビル・ライブラリーのパンデイトとして, N.S. 1042 (A.D. 1922) に Binayatosh (Benoytosh) Bhattacharya のネパール仏教図像学調査に協力し ([Bhattacharyya 1968 (1958): X, 345], [HR (1)-351]), Bhattacharya に *Niṣpannayogāvalī* の校訂を勧めた ([Bhattacharyya 1972 (1949): preface], [Khadga man 2008: 350]). 彼は碑銘研究の権威でもあり, ビル・ライブラリー旧蔵の碑文コレクション収集は彼の尽力による ([Amatya undated: 85]). またパタン市郊外の Akṣeśvara mahāvihāra にある古仏塔の碑文を解説し, その建立を N.S. 527 と比定したことも知られる ([Akṣeśvara 1115: 70]). 古文書解説に関する彼の業績については [Pant 2062/63] のコメントがある。その一方で N.S. 1048 にはテーラヴァーダ仏教の拠点となる Kindvaḥ Bahā の修復に参加し ([Lākaul 1105: 62]), N.S. 1063 にはスヴァヤンブー

(10) 榊亮三郎が収集したネワール仏教写本と Siddhi harṣa Vajrācārya 一族 (吉 崎)

の北東に Bodhimaṇḍapa siddhi vihāra を建設した ([HR (1): 616]). 文豪 Cittadhar “Hṛdaya” は、少年期に彼に師事してサンスクリット語を学んだ ([Hṛdaya 1126: 16, 31]). 一方、彼の孫たち (Ṛddhi harṣa and Vṛddhi harṣa Vajrācārya) が刊行者となった著作 ([Vadri ratna 1123]) の序文に、彼の略歴ならびに家系図が掲載されている。それによれば、彼はパンディト Kula māna²⁾のもとでビル・ライブラリーに勤務し、N.S. 1049 にはその hākim (the head of a department) に就任した。その間に Sylvain Lévi や Giuseppe Tucci らの調査にも協力した。V.S. 2007 にはスヴァヤンブーに小仏塔 caitya を建立し、それに伴ってバハ・プジャを主催した。彼はネパールで初めてグルマンダラ儀礼の活字テキストを刊行したともいう。

2. Citta harṣa and Pūrṇa harṣa Vajrācārya 上述の家系図 ([Vadri ratna 1123: ca-ja]) によれば、Suviśuddha harṣa の息子である Siddhi harṣa には、妻の Kānchī nānī との間に二男三女の子があり、長男を Citta harṣa (生没年未記載)、次男を Dharma harṣa (V.S. 1963–2031) という。Pūrṇa harṣa 氏は Citta harṣa とその妻 Cīnī māyā の息子である。京大写本 K-53 *Dvādaśa-sāhasrikā mahāpratyaṅgirā* (undated) は、“Asan-ṭol Takṣa-vahālāvasthita Vajrācārya, paṇḍita, Siddhi harṣa Vajrācāryasya putra Citta harṣa Vajrācāryya” によって書写された。N.S. 1038 にスヴァヤンブーの仏塔が修復された際の完成儀礼では、Taḥcheṃ Bahā の Citta harṣa が仏塔北面担当の司祭僧 uttarācārya を務めた ([HR (1): 329]). 彼は多くの古文書を鑑定翻訳し、それに “Paṃ. Citta harṣa Bajrācārya Asan” と署名している ([Pant 2062: 19, 21, 23, 28], [Yogeśa 2063: 11, 12, 19, 20, 21]). 彼はまたネパール国内のチベット仏教寺院を調査して、近代ネパールにおけるチベット研究の草分けと評される。しかしながら、[Jagadish 1980: xi] はネパール美術の重要なコレクションの一つに “Collection of Pandit Siddha [*sic.*] Harsha, Dharma Harsha and Purna Harsha Vajracharya” を挙げ、その継承者に Citta harṣa ではなく、Dharma harṣa の名を記している。

3. Dharma harṣa Vajrācārya Siddhi harṣa の次男 Dharma harṣa はアーシャー・サフー・クティ所蔵写本 *Dharma-samuccaya* (DP No. 3716, undated) を書写した。その末尾 (f. 80a) に、“Asan Takṣa vahāl Vajrācārya // Siddhi harṣayā dvitīyaputra Dharma harṣanam siddhayakā jula, tho saphu tāḍapatrasa // coyātaguli svayā coyā jula” (「アサンにあるタチェ・バハルのヴァジュラーチャールヤであるシッデイ・ハルシャの第二子であるダルマ・ハルシャが完成した。この写本は、貝葉に書かれていたものを見て記した」) とある。京大写本 K-83 *Mahāvastvavadāna* (N.S. 985) に添付された sūcī-patra (f. 1–3) の筆記者 Dharmma harṣa (undated, 姓および住所等の記載無し) は同一人物と思われる。

榊亮三郎が収集したネパール仏教写本と Siddhi harṣa Vajrācārya 一族 (吉 崎) (11)

る。ネパール仏教史における印刷本の流布は彼の時代に始まる。上記 [Vadri ratna 1123: ja] によれば、彼はラナ政権下でディッターの官位を有する高級官吏であったが、時代に先駆けて N.S. 1059 にアンナプールナ印刷所を起こし、仏教を宣揚する多数の印刷物を率先して刊行した。起業の年に編者兼刊行者として “*Bauddha stotra saṃgraha Nāmasaṃgīti sahitam*” と題する印刷本を出版し ([Pale-svām 23: 33]), N.S. 1060 および 1064 には “*Samkṣipta-bauddha-stotra-saṅgraha*” (14 folios) を編纂し、印刷刊行した ([Miroj 2010: 35, no. 138])。彼は V.S. 2001 にネパールで最初のポケット版カレンダーを印刷発行したことで知られる。なお京大写本 K-116 *Samputodbhava-tantra* (undated) は “*Surataśrī mahāvihārāvasthita . . . rṣa (?) Vajrācārya*” によって書写されたが、人名が判読できない。また東海大写本コレクション奥書に Siddhi harṣa Vajrācārya とその一族の名は見あたらない。

4. **Dharma harṣa Vajrācārya の息子たち** Dharma harṣa と妻 Sānu nānī (Pūrṇa devī, V.S. 1965–2033) との間には三男一女の子があり、長男 Puṇya harṣa の息子として Pramoda harṣa と Paramānanda harṣa らが生まれた。上掲 Ṛddhi harṣa と Vṛddhi harṣa は Dharma harṣa の次男と三男である。亡父 Puṇya harṣa (Juju bhāi, V.S. 1988–2049) 追善のために、Paramānanda harṣa は [Vadri ratna 1113] の刊行者となって、同書を法施 dharma-dāna として出版した。Pramoda harṣa は [Phaṇindra and Munindra 1112] ならびに [Munindra 2058] 等の刊行者となった。Ṛddhi harṣa Bajracharya (Ṛddhi harṣa Vajrācārya, V.S. 1995 生、住所等の記載無し) は、A.D. 1987 の時点で、印刷会社 Ananda Printing Press [P.] Ltd. 等を経営するかたわら、月刊宗教誌 *Kalyan* の発行人、月刊英字誌 *The Nepal Today* の編集長、ならびにネパール・マレーシア友好協会副会長として知られ、また郵趣家でもあった ([Philately 1987: 39])。Vṛddhi harṣa は Vināyaka Press の代表として、[Dibya bajra 2048] などの印刷を請け負った。前掲書 [Vadri ratna 1123] も同印刷所から、彼ら兄弟によって父の死後三十年の追善供養として刊行された。写本書写の伝統が印刷本による大量流布に転換する時代に、写本書写者と書写依頼者が編者（また編者から著者へ）と刊行者（今回のケースでは印刷所を兼ねる）の関係に変化する状況について、Siddhi harṣa Vajrācārya の一族を通じて、その一例を紹介した。写本から印刷本への移行、また法施による個人出版と商業出版の対比から派生する新たな問題については、さらに別稿を用意する。

5. **おわりに** 榊に対する Siddhi harṣa Vajrācārya の「協力」とは、彼の息子たちを含めての経典書写であったらしい。しかしながら碑文と美術品のコレクター

(12) 榊亮三郎が収集したネパール仏教写本と Siddhi harṣa Vajrācārya 一族 (吉 崎)

でもあった彼が、もっと積極的に榊の写本収集活動に関与した可能性もある。Bhattacharya のネパール仏教図像学調査にあたって、「彼は貴重なネパール図像のオリジナルや写本の数々を提供した」という ([Bhattacharyya 1968 (1958): X])。渡邊海旭と高楠が挙げる収集点数を合し、第二回収集分の混入を考慮すると、その数は京都大学写本コレクションの総数 134 点にほぼ一致する。それで榊による第一回の写本収集には二つの収集源があったように思われる。その収集源の一方に彼を想定することは十分に可能であろう。

1) ネパール仏教写本の奥書を研究対象とする試みは、それが新たな試みであるがゆえに、時としてさまざまな実務上の障害に直面する。これまで研究者たちの多くは原典テキストを再構築するための資料としてネパール写本を利用してきたので、写本の管理者たちは、研究者から寄せられる複写依頼が写本の冒頭から末尾までのすべてであることを前提にして、業務の態勢を整えてきた。今回、京都大学においてマイクロフィルムから奥書部分のみをプリントアウトする作業 (2009 年 9 月 7-8 日)、および写本原本からの確認作業 (2010 年 9 月 6 日) では、京都大学文学研究科図書館から格別の厚意を受けた。また東海大学中央図書館は、所蔵写本のすべてを一時的に東海大学熊本校舎附属図書館へ移し、三週間にわたる吉崎の調査 (2010 年 2-3 月) に便宜を図ってくださった。記して御礼を申し上げます。これらの調査結果は未発表のままであるが、後者の原稿「東海大学所蔵サンスクリット語写本ネパール語奥書調査ノート」(2010 年 3 月 23 日) は東海大学中央図書館に提出してある。 2) 拙稿 [吉崎 2012] 参照。高楠順次郎は 1910~11 年にかけての半年間にわたり、パタンの Hiranya (varṇa) mahāvihāra のパネイト Kula māna Gubhāju に就いて『大乘莊嚴經論』を学んだという ([Videśī 1098: 20])。

足利惇氏 1980 「榊亮三郎先生、その人と学問」『榊亮三郎論集』国書刊行会：序文 pp. 3-9。高山龍三 2009 「日本とネパールの交流・補遺 2」『日本ネパール協会会報』No. 215, pp. 11-12。中村元 1967 「ネパールの仏教」『心』20-5, pp. 58-64。吉崎一美 2012 「河口慧海に梵語文法を教授したクルマン博士」『印度学仏教学研究』61-1, pp. 11-15。吉崎一美・田中公明 1998 『ネパール仏教』春秋社。 [Akṣeśvara 1115]: Hema rāj Śākya, N.S. 1115, *Akṣeśvara mahāvihāra: Puco chagū adhyayana*, Patan. Amatya, Shaphalya (ed.), n.d. (1989?), *National History Guide Committee: Source Manual Series No. 3*, Kathmandu: Dep. of Archaeology. Bhattacharyya, Benoytosh, 1968 (1958), *The Indian Buddhist Iconography*, Calcutta: Firma K. L. Mukhopadhyay. Bhattacharyya, Benoytosh, 1972 (1949), *Niṣpanna-yogāvalī*, GOS, no. 109, Baroda. [BSP 7-1]: Pūrṇa ratna Bajrācārya (ed.), V.S. 2021, *Bṛhat Sūcī Patram: Bauddha-viṣayakaḥ Saptamo bhāgaḥ Prathama-khaṇḍaḥ*, Vira-pustakālayataḥ prakāśitaśca, Kathmandu. Dibya bajra Bajrācārya (anu.), V.S. 2048, *Ācārya Dinnāga viracita Prajñāpāramitā piṇḍārtha saṃgraha*, Kathmandu (?): Akhila Nepāl Mahāyāna Bauddha Samāj. Goshima Kiyotaka and Noguchi Keiya (eds.), 1983, *A Succinct Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in the Possession of the Faculty of Letters, Kyoto University*, Kyoto. [HR (1)]: Hema rāj Śākya,

榎亮三郎が収集したネパール仏教写本と Siddhi harṣa Vajrācārya 一族 (吉 崎) (13)

N.S. 1098, *Śrī Svayambhū mahācaitya*, Kathmandu: Svayambhū Vikās Maṇḍala. [Hṛdaya 1126]: Phaṇindra ratna Vajrācārya (ed.), N.S. 1126, *Cittadhar “Hṛdaya” yā JIGU JĀTAH*, Kathmandu: Nepāla Bhāṣā Pariṣad. Iwamoto Yutaka (ed.), 1960, “Catalogue of the Buddhist Sanskrit Manuscripts in the Library of Tokai University,” *Proceedings of the Faculty of Letters, Tokai University*, vol. II, pp. 1–37. Jagdish Chandra, 1980, *Bibliography of Nepalese Art*, New Delhi: Delhi Printers Prakashan. Khadga man Shrestha, 2008, *History of Buddhism in Nepal: With Special Reference to Vajrayana Buddhism*, Kathmandu. Lākaul, Vaikuṅṭha prasād, N.S. 1105, *Nepālae “Sthaviravāda” gūkatham vahgu khaḥ?* Kathmandu. Miroj Shakyā (ed.), 2010, *Catalogue of Digitized Rare Sanskrit Buddhist Manuscripts*, vol. 1, California: University of the West. Munindra ratna Bajrācārya, V.S. 2058, *Nepālakā Cār Prasiddha Karuṇāmaya Lokeśvara*, Kathmandu: Śubhakāmanā Printiṅg Pres. [Pale-svām 23]: Phaṇindra ratna Vajrācārya, N.S. 1125, “Nepālamaṇḍalayā Bauddha saṃskṛtīi stotra vācana paramparā,” *Pale-svām*, no. 23, pp. 27–33, Lalitpur: Lotus Research Centre. [Pant 2062]: Maheśa rāj Pant, “Vi. saṃ. 1514 dekhi 1825 bhitrakā ahilesamma prakāśamā na-āekā 8 vaṭā patra,” *Pūrṇimā*, pūrṇāṅka 118, V.S. 2062, pp. 18–30, Kathmandu: Saṃsōdhana-maṇḍala. [Pant 2062/63]: Maheśa rāj Pant, “Saṃsāradevīko pratimāsthāpanā garī rākhiēko tāmrapatrako Siddhi harṣa Vajrācārya (Vi. saṃ. 1936–2009) le paḍheko pāṭha ra gareko ulthā, *Pūrṇimā*,” pūrṇāṅka 118 (pp. 1–17), 123 (未見), 124 (pp. 1–31), V.S. 2062/63, Kathmandu: Saṃsōdhana-maṇḍala. [Phaṇindra and Munindra 1112]: Phaṇindra ratna Vajrācārya and Munindra ratna Vajrācārya, N.S. 1112 (V.S. 2048), *Vajrayānae pulupālu*, Kathmandu: Śubhakāmanā Printiṅg Pres. [Philately 1987]: *Philately (Half-yearly Journal)*, vol. 14, no. 1, January 1987, The Nepal Philatelic Society. [Vadrī ratna 1113] Vadrī ratna Vajrācārya, N.S. 1113 (V.S. 2049), *Dharmadhātu vāgīśvara vratavidhi va dharmadhātu vāgīśvara maṇḍala*, Kathmandu: Vīnar Printiṅg Pres. [Vadrī ratna 1123] Vadrī ratna Vajrācārya, N.S. 1123 (V.S. 2060), *Graha maṇḍala va Lokottara pūjā*, Kathmandu: Vināyaka Pres. [Videśi 1098]: Revatī Amātya et al., N.S. 1098, *Videśi vidvān va Nepālabhāṣā*, Patan: Sāhityayā Mūlukhā. [Who’s who 2003]: Phaṇindra ratna Vajrācārya (ed.), 2003, *Mhasikā dhalah: Nepālabhāṣā sāhitya khalay yogadāna dupinigu*, Kathmandu: Nepālabhāṣā Ekedemi. [Yogeśa 2063]: Yogeśa Rāj, “Thimi bālakumārī mandirsambandhi kehī kāgajāt,” *Prācīna Nepāl*, saṃkhyā 160, V.S. 2063, pp. 9–28, Kathmandu: Purātattva vibhāg. (注: 出版社名未記載の文献は法施による個人出版である)

〈キーワード〉 榎亮三郎, 京都大学梵語写本, 東海大学梵語写本, Siddhi harṣa Vajrācārya (東洋大学大学院修了)